
ミミック・ガール

来戸 述

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミミック・ガール

【Nコード】

N1593X

【作者名】

来戸 述

【あらすじ】

森で見つけた宝箱を開けてみると 出てきたのは女の子！？
「オレは？ミミック？のシエル。以後、よろしく」
竜王の支配によって人間同士の争いがなくなった世界で、？偽装屋？の青年と精霊の少女が織りなすハイ・ファンタジー、開幕。

序幕

漆黒の闇に、黄金色の輝きが淡く浮かび上がった。

不思議な輝きは瞬く間に光度を増し、やがて獐猛な牙と爬虫類の鱗を持った大きな蛇のような生き物の形をとっていく。

「偽物が……調子に乗るなあ！」

少年の怒号とともに、金色の輝きが暗闇を斬り裂いた。風一つ吹いていかなかったはずの空間に、突如として嵐が巻き起こり、激しい雷が獅子の雄叫びをあげる。

対するは、一人の女。

一陣の颶風が必殺の雷光をまとって、佇立した女に襲いかかる。絶対の死が女を捉えたかに見えた、その刹那。

「偽物はどつちだ？ 我々に 世界に、偽物の平和は必要ない」
するとどうだろう。雄牛のように猛り狂っていた風も雷も、女の掲げた緋色の手のひらの中に吸い込まれ、幻のように消えてしまっただではないか。

「な、なにっ！」

「所詮、この程度か……つまらん。実につまらん」

大儀そうに腰から剣を抜き、女は少年に歩み寄った。

ゆっくりと、一步一步踏みしめながら 女の顔からは何の感情も読み取れない。

「……くそっ！」

身を切り裂くような恐怖に襲われ、少年はきびすを返して逃げ出した。絶望に凍り付いた背中に、女のつぶやくような言葉が突き刺さる。

「ひと思いに殺してやるっ、苦しまずに済むように。その代わり

」

女の緋色に染まった腕が、闇色の間合いに光った。

「貴様の竜を、奪わせてもらっ」

世界に、少年の絶叫が響き渡った。

第一幕

東からの柔らかい日差しが、眠りから目覚めた森の木々を照らしていた。早朝の爽やかな風が緑の間を駆け抜け、気持ちよさそうにさわさわと音を鳴らす。賑やかな小鳥たちのさえずりが、深緑の園に新たな一日の始まりを告げていた。

人間が立ち入ることなど滅多になく、ときおり細い獣道を目にするくらいの青々とした森の奥地。

もしこの場所に吟遊詩人が立ち寄ったならば、目の前に広がる光景を？汚れた俗世の一切から隔絶された空間？とでも表現するのだろうか。

そんな美しい自然の中を、一人の青年が歩いていた。

(ええっと、西はどっちだっけ?)

ロウ・レイNZは立ち止まると、着古したベストのポケットからコンパスを取り出し、一瞥してまたポケットに戻した。

(ベルガノの街は、南西の方角のはずだから……こっちか)

適当に当たりをつけ、ロウは再び歩き始める。

街と街、村と村をつなぐ石畳の街道から、やや離れた場所にこの森は広がっている。涼しい微風が青年の頬を撫で、可憐な花をつけた植物たちの甘美な香りがその鼻孔をくすぐった。

ロウが辺境の村を出発して、すでに小一時間ほど経つ。

しかしその間、彼は一度たりとも体を休めたり、腰を下ろしたりしてはいなかった。人の手の加えられていない深い森を、こつやつとときどきコンパスで方角を確認しながら、この青年はまったく休むことなく歩き続けているのだ。

見た目には、それほど体力があるようには思えない。

外見は絵に描いたような中肉中背で、どちらかといえばひ弱そうでさえある。特に目立った特徴もなく、これと違って印象に残るような容姿でもない。

強いていうなら、鼻梁に乗っかっている銀縁の眼鏡が唯一、彼が持つ外見上の個性だった。

「おっと」

ごつごつとした木の根に足を取られ、ロウはあやうく転びそうになった。体を支えようと手を伸ばし、その拍子に手に持った大きな鞆が近くの岩にぶつかる。黒々とした岩から、びっしりと生しているしている苔の一部が剥がれ落ちた。

「……つとと、危ない危ない」

ロウは大きな鞆を持ち直すと、その縁を軽く叩いて付着した苔を地面に落とした。後生大事に抱える革製の旅行鞆は、修理に修理を重ねてボロボロになっており、焦げ茶色の表面は至る所に傷がついていた。

年季の入ったそのトランクは、彼が旅路で晒された風雨がいかばかりだったのかを如実に物語っている。

（さあて、この先が問題だな。ここからの道のりをどう進んでみよう？）

再び立ち止まると、ロウはポケットから取り出した古ぼけた地図を広げて唸った。うっすらとかいた汗でずり落ちてきた眼鏡のブリッジを押し上げ、辺りを見渡す。

（もうだいたい街道からは離れてるはずだから、これ以上は森の奥へは入らない気がするんだよなあ。きつと、この距離を保ちつつ、街道に対して並行に進むはずだと思うんだけど……）

いつの間にか小鳥たちは放歌高吟することを止め、静まりかえった森からは風が葉を揺らす音しか聞こえてこない。

（いや、それとも万全を期して、まだ街道から離れておくのかな？ うーん、歩き通して今日中にベルガノに着こうとするか、それとももう少しだけ迂回して野宿を挟むか……それによって道筋が変わってくるんだよなあ）

しばしの間、黙考し、ロウは顔を上げた。ぼろ布のような地図をポケットに押し込み、やや右に進路を変える。

「まあ、たまには適当に歩くのもいいか」

愛用の旅行鞆をぶらぶらさせて、ロウは鼻歌交じりに闊歩していた。

(……ん?)

風の中に奇妙なおいを感じ取ったのは、そのときだった。大量の生野菜をすり鉢で丸ごとすり潰したような、独特の青臭いにおい。眉をひそめて、ロウは歩みを早める。

小高い傾斜を登った先に、においの正体があった。

「これは……」

そこにあつたのは、散乱した木片の山だった。

かろうじて外枠を残した大きな木箱が、すぐ目の前に横たわっている。編み込んだような木の根の斜面を駆け下り、ロウは木片の山のそばへと近寄った。

どうやらそれは、無残に打ち壊された荷車の残骸であるらしい。大きさからして、一人乗りの馬車だろうか。ロウは形の崩れた荷車の周囲に、さっと目を走らせた。

血の跡はない　ひととおり検分して、ロウは安堵のため息をついた。御者と馬は、無事に逃げられたようだったからだ。

(たまにいるんだよなあ、こういう辺鄙な場所をわざわざ選んで行商する人が)

人気のない場所を縫うようにして街と街を行き来する商人たちの目的は、早い話が、関税逃れである。

この地方ではその土地の有力者である貴族や地主たちが、誰に断るでもなく関所を設け、人を雇っては勝手気ままに関税を取っている。自分の領地を通る行人たち相手に、通行料と称して金銭や扱っている商品の一部を要求するのだ。そういう関所は、たいていが人通りの多い街道につくられている。

大規模なキャラバンならいざ知らず、たった一人で諸国を渡り歩く行人なら、自分の利益を少しでも上げるために、人通りの多い街道は除外して、このような人気のない森や山の路程を通ることも

多い。

そして運の悪い者は、こうして全財産を失う憂き目に遭うのである。

(……『あれ』持ってたんだろうなあ)

ロウは残骸の山の前にかがみ込むと、白い手袋をした手でせつせとその残骸をどかし始めた。さつきから鼻につく、青臭いにおいの正体を確かめるためである。

(こんな目に遭うんなら、初めから街道の方を通っておけばよかったろうに。勇気と無謀は違うって、きつとこういうことなんだろうね)

たった一人、孤独に旅を続けていると、どうしても心細くなる。昼間は照りつける日差しに体力を奪われ、話し相手といえど馬のみ。そして夜になれば暗闇から聞こえる異形の声、目に見えない恐怖が背筋を凍らせる。

きつとこの行商人も、そんな恐怖に怯えながら旅を続けていたのだろう。ひよっとしたらただの行商ではなく、密輸品でも運んでいたのかもしれない。そうした後ろめたさも相まって、彼らは『決して持つてはいけない物』までも所持するようになってしまふのだ。

「……やっぱり、『武器』持ってたんだ」

ロウが瓦礫の中から見つけたのは、真っ二つに折れた短いナイフだった。質素な柄は土で汚れており、鈍く光る刃の表面にはべつとりとした粘液が付着している。

(こんな程度の武器で、どうこうできる相手じゃないだろうに……)

これだから素人さんは困るよ)

瓦礫の中にナイフのなれの果てを投げ捨て、ロウは再び残骸を漁った。さつきからずつと鼻を突いている嫌なにおい。その根源が必ずあるはずなのだ。

荷台の底板だったのだろうひときわ大きな板を横に除けると、ようやくその正体が姿を現した。

(うわ……勿体ないなあ)

底板の下に散らばっていたのは、銀貨何枚分になるともわからな
いほどの薬草の束だった。それらが萌葱色の塊となって、草いきれ
のような何ともいえない悪臭を放っていたのだ。

たくさんの長細い葉からひとつを手に取り、ロウは顔をしかめた。
（ああああ、こんなに汚しちやつて。高いんだぞ、この手の生薬は）

鮮やかな色からして、幸いにも放置されてからさほど日は経って
いないようだ。ロウは薬草をひとつひとつ、じっくりと吟味しなが
ら、まだ使えそうなものを選び分けていった。もともと薬草には長
期の保存が利くものが多く、しかもにおいがきついものほど効能が
高くても張るといふ。ならば、これを放っておく手はないだろう。
（それに、なにも僕だけが使うわけじゃないしね）

無尽蔵にあるとも思われた萌葱色の山から慎重に選別した結果、
両手でも抱えきれないほどの薬草を取り出すことができた。

にんまりと笑い、ロウは次の作業へと取りかかる。

鼻をつまみたくなるような、きついにおいを放つ薬草だ。さらに
日が経って雨風に晒されれば、腐敗なり発酵なりして、より遠くか
らでも嗅ぎつけることができるだろう。野生の獣はこのにおいを忌
み嫌っているというから、きっとこの場所を避けて通るに違いない
し、仮に見つけたとしても先ほどのロウのように物色したりはしな
い。

（この草の価値がわかってるのは、いまのところ人間だけだからな
あ）

きよろきよろと周囲の様子をうかがって、ロウは思い描いた条件
に合う場所を探す。この荷物の元の持ち主や、他の人間が来ても見
つからないような場所。それでいて、これを見つけてほしい人間に
はすぐに見つけられるような場所。

すると、ちょうど近くに蔽つく生えている林木の根本に、小さな
子どもがすっぽりと入れる程の大きさの洞を見つけた。

（よし、いい感じいい感じ）

ロウはその樹の根に歩み寄ると、抱えていた薬草を綺麗そうな岩

陰にひとまず置いて、持っていた旅行鞆を開いた。苦楽をともしてきた大きな旅行鞆の中は、最小限の衣類や洗面具などの生活雑貨が窮屈そうに詰まっていた。

鞆の中から、まずは小さな麻袋を取り出し、それから味気なく折りたたまれたシャツの隙間に手を入れて角張った鞆の分厚い底板を持ち上げる。二重底の下から出てきたのは、小さな板きれと簡素な金具一式だった。ロウは手のひらに乗るくらいの大きさの板きれを数枚、引っ張り出すと、白い手袋をした手のまま器用に組み立て始めた。

四角形に組み上がった板を小さな金具で固定し、全体のバランスを確認。均整がとれていることを確かめてから、今度は底板を取り付けてさらに枠を強固なものにしていく。次いで、蝶番になっている金具を手際よく取り付け、さらに板を組み込んでいった。

(これでよし、と)

ロウは満足そうにうなずいた。完成したのは、蓋のついた小さな箱だった。

いや、ただの箱ではない。それは、冒険小説の挿絵にでも描かれていそうな、赤みがかつた？宝箱？だった。

早速、ロウは片手に乗るくらいの大サイズの宝箱に、先ほど選り分けた薬草を詰め込みにかかった。見た目以上に容量はあるらしく、宝箱は次々に薬草を飲み込んでいく。

箱の中身がいっぱいになったところで、ロウは薬草を詰め込むのを止め、残りは麻袋の中に放り込んだ。蓋を閉め、また別の金具で蓋全体を固定して、作業は終了である。

樹の洞の中に宝箱を丁寧に置き、ロウはふうとため息をついた。

(あとはこいつを『落し子』の誰かが見つけてくれるまで待つだけだね)

旅行鞆の二重底を元に戻し、薬草の残りを入れた麻袋を縛ると、伸びをしながら立ち上がった。

？落し子？と呼ばれる旅人たち。彼らに見つけてもらわなければ、

この宝箱も意味をなさない。

彼らの旅は困難を極め、行く先々で災難に見舞われるのが日常。旅の途中で命を落とすことも、まったく珍しいことではない。そんな彼らの助けに少しでもなれば、その一心で、ロウたち『シェイプシフター偽装屋』はこうやって各地に宝箱を設置しているのだ。

今回は拾った薬草を詰めたが、もちろん普段は自前の道具や薬品あるいは食料などを入れる。数分ほどすれば、宝箱の染料が赤銅色から周囲の環境に近い色に変色し、景色に溶け込んで普通の人間には容易に発見できなくなる。

だが、その染料から発せられる微弱な『息吹』の力を感じ取り、落し子たちは目に頼ることなく、ロウたち偽装屋が用意した宝箱を見つけることができるのだ。そうやって、彼らは過酷な旅路の一助を得るのである。

(本当は、落し子が堂々と街道を歩けるようになればいいんだけど……ん?)

ふと、ロウはカチツ、カチツという奇妙な音を背後に聞きつけた。硬い殻をぶつけ合わせて鳴らしたような、連続的な音。ロウはこの種の音を仲間との意思疎通に使っている存在を、たったひとつだけ知っていた。

(勘弁してよ……)

恐る恐る、背後を振り返る。

薬草を運んでいた馬車を襲い、鋼鉄のナイフを真つ二つにへし折った犯人。

? 武器を持つ者? だけを狙って狩りをするという、変わった習性を持つ異形の生命体。

「り、徒影……」

思わず、ロウの口からその単語がこぼれ出た。

ロウの背後に、この世で最も獰猛な生き物が佇立していた。

まるで影が実態を持ったかのような漆黒の甲殻。鋼鉄よりもなお硬いその甲殻に身を包み、左右に裂けた口からは獰猛な牙が生え、

屈強な手足には長く鋭い爪が獲物を切り刻みたがっている。姿形は蟻螂を連想させるが、しかしその体の大きさはまるで灰色熊だ。

宝箱を設置するのに気をとられて、この異形の生命体が近づいてくるのにいままで気がつかなかつたのだ。

（ま、待て待て！ 焦るな、大丈夫さ。こいつらは腹を空かしていない限りは、武装した人間しか食べないじゃないか。ほら、僕はいま何の武器も持っちゃいない。こいつが僕を襲うはずがな）

唐突に甲殻の徒影が、数十羽の烏の集まりよりも大きい、耳障りな鳴き声で吠えた。

ロウの額から冷や汗が吹き出る。

（前言撤回！ こいつは腹を空かせてる。僕を食べるつもりだ！！）
こうなつてはもう仕方がない 逃げるが勝ちだ。

ロウが足下の旅行鞆に手を伸ばしたのと、徒影が目の前で巨腕を振り上げたのがほぼ同時。

間髪入れず豪速で落下してくる漆黒の斧を、頭上に掲げた旅行鞆の腹が受け止める。

「くっ……」

細い体のどこにそんな力を隠しているのか、ロウは徒影が放った必殺の一撃を受け止める。だが、完全には受けきれしていない。

「偽装屋の七つ道具をなめんなよ！」

押し負けたかに見えた刹那、ロウは慣性を使って、旅行鞆の取っ手をひねった。

武器には見えないものが、武器でない保証などない 特に、それが偽装屋愛用の所有物ならば。

取っ手の動きに連動して、底板の一部が勢いよくスライドし、徒影めがけて霧状の液体が噴射した。強烈な刺激臭のする毒液を両目にもろに浴び、徒影が上体を仰け反らせる。

（よし、いまだ！）

もう片方の前肢を蹴りつけ、斧の影から脱出。右手ひとつで旅行鞆を半回転、噴霧の仕掛けを元に戻す。と同時に、空いた左手で、

地面に置いたままだった麻袋を拾い、遠心力に任せて投げ上げた。

(たかが徒影一匹にやられるようじゃ、偽装屋失格だつての！)

目をつぶされて怒り狂う徒影から一足飛びで距離をとり、投げ上げた布袋に狙いをつける。旅行鞆の角から垂れている紐をつまみ、定めた狙いのちょうど真逆に引つ張る。鞆の側面から筒がせり出し、バネ仕掛けの矢が三本、立て続けに放たれた。

徒影の強固な甲殻を貫くにはあまりに短い矢は、しかし、安物の薄い麻布を正確に射貫いて、内部で炸裂。深緑の薬草が四散する。鉄色の雨を浴びて、徒影は猛り狂った。

「へっ、ざまあみる！」

辺りに立ちこめる強烈な悪臭　いくら徒影といえど、もう人間の臭いなど嗅ぎ分けることなどできないだろう。これで徒影は、一時的にはあるものの、視覚と嗅覚の両方を失ったことになる。

駆け出したロウを、かろうじて残った聴覚に頼って追跡しようとするが、いきなりそんな器用な真似ができるはずがない。こうなれば、もうロウの独壇場だ。

(独壇場っていつても、後はただ逃げ回るだけなんだけど……)

自嘲気味に笑って、ロウは前に向き直り

直後、横つ腹に強烈な一撃をくらった。

「ぐあっつあ、かはっ……」

肺から空気がすべて押し出され、胃液が逆流してくる。

(な、にっ……!?)

気を失うぎりぎりのところで、かろうじて意識を保ち、ロウはのたうち回りながらも非必死に顔を上げる。偽装屋の青年を見下ろすようにして、山羊ほどの大きさの影。

ロウは己の油断を呪った　徒影は、二匹いたのだ。

先ほどの徒影が大型の灰色熊ならば、こっちはその子どもといったところだろう。色が薄い紺色であるところを見ると、まだ成長しきっていない幼体らしい。

にもかかわらず、この膂力。たった一撃で全身を駆け巡った痛み

は、激痛なんて表現ではまるで足りない。それでもロウが気絶しなかったのは、死への恐怖と、それ以上に偽装屋としての矜持があったからだろうか。苦痛に歪む顔で、ロウは幼い徒影をにらみつけた。「ぼ……くは……こんな、ところで……」

絞り出す声も、徒影が甲殻をぶつけて鳴らすカチカチとした音にかき消されてしまう。なんとかして立ち上がるも、踏み出す足がふらつく。倒れないようにするので精一杯だ。

か弱い人間を、幼い徒影はまるで玩具で遊んでいるかのように追尾する。人外の表情は、ロウには読み取れなかったが、きっとその顔は獲物を捕らえた喜びに笑っているに違いない。

（どうする、ロウ？ 何か策を考える。どんな困難も靴ひとつで乗り越えてきた、一人前の偽装屋だろ、お前は！）

ロウが徒影に襲われたのは、これまでに一度や二度のことではない。だが、ロウはその度に、この異形の生命体から逃げ出してきたのだ。

その経験が　というより、意地と根性が　ロウの足を生き残る方角へと向ける。

森の中を駆けるロウの後方で、徒影の幼体はまだカチカチと音を鳴らしている。おそらく、獲物を仕留めたことを親に報告しているのだろう。どんな動物も、子どもの頃は親に褒めてもらいたいものだ。

（親子水入らずの食卓に並ぶのは、ごめんだぜ……！）

重たい旅行鞆を気力で握りしめ、ロウは後ろを振り返った。

「徒影の腹の中に入るくらいなら……一か八か賭けてみるさ」

最後の力を振り絞って、跳躍。

（きっと、こいつ驚いた顔してるんだろうな）

ロウの跳んだ方向に、着地すべき足場はない。

大地に刻まれた裂け目　森の奥地に口を開く溪谷へと、その身を投げ出し　ロウは直下の濁流に飲み込まれていった。

第二幕

「う、うーん……」

仄暗い谷底で、ロウはゆっくりと目を開けた。ぐっしょりと濡れた衣服が、ロウの全身から問答無用に体温を奪っていく。どうやら仰向けに寝ているらしい。急流に流されるうちに眼鏡をなくしてしまったようで、ロウはぼやけた視界で明るい方を見た。

はるか上方に、青い空が広がっている。ロウが目を細めると、綿をちぎって浮かべたような白い雲が、緩やかに青空の海を泳いでいるのが見えた。

(どれくらいの間、気絶していたんだろう……)

徒影に追い詰められて、谷底への決死の飛び込みをした。重力に引つ張られてどんどん落ちていき、水面に叩きつけられたところまでは覚えている。馬車に轢かれたような衝撃が全身を襲い、堪えられなくなって気を失ってしまったのだ。それを考えると、いまこうして生きているだけでも奇跡的といえるだろう。

「いつ、痛たた……」

上体を起こすと、側頭部に鈍い痛みが走った。手で押さえ、髪の毛が生え際を探る。幸いにも、血は出ていないようだ。頭にとどまらず、体のあちこちから悲鳴が上がったが、とりあえず大きな怪我はしていない。

大きく深呼吸して呼吸を整えると、ロウはふらつきながら立ち上がった。

(どこまで流されたんだろうなあ……) っと、さすが仕事道具は死んでも放さなかったか。ま、死んでないけど)

無意識のうちに自分の左手が握りしめていた旅行鞆を見やって、ロウは一人微笑んだ。ロウの左手は、主の意思とは無関係に、古びた旅行鞆の取っ手をつかんだまま硬直している。指を一本一本解いていき、ようやくまた言うことを聞くようになった。

そんな頑固な左手の先には、小川が静かに流れていた。切り立った二つの崖に挟まれて流れる澄んだ川は、ロウを飲み込んだものと同じものとは思えないほど穏やかな表情を見せていた。

（上から見たときははすごい速く流れてたのに。この様子だと、だいぶ流されちゃったみたいだなあ）

足下の砂利を踏みつけて、ロウは湿った岩壁に近寄る。

（よし、この壁を登れ……るわけ、ないか）

谷底の水の流れは、主には前日に降った雨の量によって決まるといふ。ここ数日は雨が降っていなかったから水位も低いが、時期が時期ならロウの背丈よりも高くまで水が流れ、頑強な岩壁さえもその流れで削り取ってしまうのだらう。ロウが見つめる消炭色の岩々は、どれも角が取れていて、手足を掛けて登れるところなどないに等しかった。

ロウはポケットから地図を出して 水を含んだ地図が使い物にならなくなっていることに気づき それをぽいと投げ捨てて記憶の紐をたぐった。

（たしかこの川は南東に向かって流れた後、西に折れてそのままベルガノがある方向に流れていたはずだから……）

山奥から流れるこの川の水は、ベルガノの街の貴重な水源になっていたはずだ。地図上では、水門を通って街の中に入り、そこからはいくつかの用水路に分かれて、また街の外で一つの流れに戻っていたはず。そこを通っているとすれば、さすがに誰かに気づかれて、今頃は街の診療所にも担ぎ込まれているに違いない。

（つてことは、あの街よりも下流に流されてるってことはないよなとすると、このまま川の流れに沿って行けば、街までたどり着けるんじゃないか？）

ともかく、こうやって立ち止まったまま考えるより、実際に歩いて確かめてみるのがよい ややあって、ロウの頭はそう結論づけた。思考よりも行動に重きを置くところが、各地を巡る旅に暮らす偽装屋らしい性格だ。

空を見上げれば、岩の天井を切り裂いたような頭上の景色を、一羽の鳥が飛んでいた。ロウは愛用の大きな旅行鞆から予備の眼鏡を取り出して掛けると、緩やかに流れる小川の下流へと足を向けた。しばらく歩みを進めたところで、ロウは違和感を感じてふと立ち止まった。岩壁に群生するツタ植物の中に、不審な輝きを見つけたのだ。

（なんだ？ この光……？）

それはほんのわずかな光だった。並の人間ならば気づかずに通り過ぎてしまつてあろうわずかな違和感を察知できたのは、偽装屋としての観察力の鋭さからだろうか。

奥にわずかな光が差すツタ植物は、びっしりと岩壁に張り付いている。ロウは好奇心も手伝つて、それらの植物を引きはがしてみることにした。白い手袋をした両手が、力任せにツタを引っ張ると、木賊色の植物は意外にも素直に剥がれ落ち、その奥からぽっかりと空いた穴が姿を現した。

（やけに大きな洞窟だな。ん……向こう側に行けるみたいだ）

見ると、洞窟の奥に薄明かりが差していた。光の正体はどうやら洞窟の向こう側の出口を照らしている日の光のようだ。

ここで、ふつうの人間ならば気味悪がるころなのだろうが、ロウは偽装屋である。

ベリベリと音を立てて、入り口を塞ぐ邪魔なツタをすべて引き剥がすと、ロウはうつすらと明かりの見える洞窟の奥へと進んでいった。本来ならば、日が暮れる前にベルガノに着いておきたいところなのだが、こういう人目につかない場所を調べるのも偽装屋の大切な役目である。

（面白そうだなあ。冒険の香りつてやつ？ いったい何があるんだろう）

……無論、膨れあがった好奇心がはち切れんばかりだったことは言うまでもないのだが。

五十歩と行かぬうちに、じめじめとした洞窟は終わりを告げた。

代わりにロウを迎えたのは、世にも奇妙な景色だった。

「これは……すごいな……」

思わず、ロウの口からため息がこぼれ出た。洞窟の先に広がっていたのは、想像を絶する光景だった。

山を垂直にくり抜いたような、そんな巨大な穴の中。そこにあったのは、見たことも聞いたこともない、古めかしい遺跡だった。小さな村ならすっぽりと収まってしまいそうなほどの穴の内部に、石造りの怪しげな建造物が立ち並んでいるのだ。

ロウがいるのは、空に向けて口を開く巨大な穴の中腹辺りだ。穴の底からはいくつも石の塔が立っており、塔と塔は石橋で結ばれていた。石橋はロウが立っている場所からも伸びており、まるで突然の来訪者を歓迎しているかのようにさえ見える。

（こんな穴の話を、旅の吟遊詩人から聞いたことがあるぞ。天坑っていったっけな？ なんのいたずらか、自然はときどきこういう巨大な穴をつくり出すんだって……）

昔の記憶をたぐり寄せながら、ロウは恐る恐る、石橋の上に足を乗せた。穴は自然のいたずらだとしても、石の橋や石の塔は、どう見たところで人の手による物である。

（昔はここに村でもあったのかな？）

だとすれば、無人になったのはよほど昔のことなだろう。藍鼠の石橋はあちこちに草木が生い茂り、半ば自然と一体化している。にもかかわらず、靴の底からはびくりとも動かない石の固い感触が伝わってきて、ロウの心を落ち着かせた。これを造った人々は、とても優れた石工技術を持っていたようだ。

橋の中腹辺りまで来て、ロウはふと頭上に目をやった。仰ぎ見た先には、澄み渡った青空が、巨大な穴の円周によって真ん丸に切り取られていた。ため息が出るほどの美しい円である。

なんとという大自然の摩訶不思議だろう。一度はそう感心したものの、ロウの頭はすぐさまその考えを否定した。

（違う……自然にできたものが、こんなにきれいな円をしているは

ずがない。あそこの岩肌なんて、まるで鉋で削ったみたいじゃないか)

疑問はすぐに確信へと変わった。自然にできた大穴の中に、人間が塔を建てたのではない。巨大な縦穴も強固な塔や石橋も、すべて人間がつくり出したのだ。

(あるいは、人間ではない誰か……かもしれないな)

ロウは、かつて小耳に挟んだ古の伝承を思い出した。

その昔、人類最後の愚行と呼ばれた幻獣戦争よりも以前、この世界には数多くの精霊が棲んでいたという。彼らは、矮小な人間たちとは比較にならないほどに強大な『息吹』を有し、高い知能と理性を持って独自の生活を営んでいた。

ときに賢者の顔をして人間に力を与え、ときに人間を惑わしては面白がり。今となってはわずかな文献や、吟遊詩人たちの歌にのみ姿を残す彼らだが、もしかしたらここはそんな精霊たちが暮らしていた場所なのかもしれない。

(こりゃあ、とんでもない場所を見つけちゃったな……)

驚き半分、嬉しさ半分で、ロウは巨大な穴の中心へと進んだ。

(けっこう息吹が強い……もしかしたら、落とし子もこういう場所に立ち寄るのかな)

手袋で隠した左手の甲に、焼けるような痛みが走る。

間違いない。ここには魔力を発生させている『何か』がある。

遺跡の中心に立つ塔は、一際高くそびえており、その頂点には祭壇のような儀式めいた台座が据えられていた。

そして、その祭壇の上には

「これは……宝箱？」

ロウの視線の先に、偽装屋にとってはあまりに見慣れた直方体が横たわっていた。大きさこそ彼らが扱う物より一回りほど大きかったが、形状はとてもよく似ている。周囲の石に溶け込むようにして鉛色に変色している箱は、偽装屋が落とし子たちのために各地に設置する宝箱に、驚くほど類似していた。

だが、偽装屋の使う宝箱に、大きさ違いの品はない。とすればこの場合、形状が似すぎていることが問題だった。

(偽物、か……僕の目は誤魔化せないよ)

偽物の宝箱は、落し子に悪意を持ってしている輩が、よく使う手である。偽装屋が落し子を支援するために設置する宝箱にそっくりな箱を偽造して、中に毒や罠を仕掛けるのだ。駆け出しの落し子などはよくこの手に引っかけた。故に、そういった偽物を排除するのも偽装屋の大切な役目のひとつだった。

(つと、鍵がかかっているな)

宝箱のふたを開けようとしたが、ぴくりとも動かない。ロウは慌てず、懐に手を入れると、ポケットから細長い針金を二本、取り出した。

特殊な形状の先端を持つその二本の針金を宝箱の鍵穴に差し入れ、慣れた手つきで鍵穴の内部を引っ掻く。宝箱によく使われている錠前は、中にある爪を上手いこと横にずらせば解錠できるものが多い。ピッキングは、偽装屋としての当然の技術だ。

(楽勝、楽勝)

だが次の瞬間、ロウの耳に、獣のうめき声のようなものが聞こえた。

(なんだ？ 徒影か!?)

はっと後ろを振り返る が、そこには誰もいない。辺りを見渡しても、荘厳な遺跡が無言のまま広がっているだけだった。石の建造物が声を発するわけもない。

(気のせい……か)

気を取り直して、ロウは再び解錠作業に取りかかった。

細い針金は力を込める向きを間違えると、簡単に折れてしまう。鍵穴の中で折れてしまったては面倒だ。慎重に、二本の針金を鍵穴の奥へ奥へと差し込んでいく。それらを交差させ、小さな穴の中の感触を確かめるように手首を捻り

「うっ、うっうっ……」

今度は、よりはつきりと、先ほどのうめき声が聞こえた。

(何なんだ、いったい!?)

すぐさま後ろを振り返るが、やはり誰もいない。ロウの脳裏を漆黒の影がよぎる。

(もしかして、また徒影か?)

徒影は大陸の生き物の中でも指折りの強さを誇っているため、奴らには何かに擬態したり、物陰に隠れたりする本能がない。つまり、注意さえ払っていれば、その接近を肉眼で察知することが可能だ。

姿が見えないということは、いまはまだ直視できる距離にはいないということだ。だとすれば、こんなところでぐずぐずしては行かない。一刻も早くこの宝箱を開けて、中身を廃棄しなければ。一日に二度も徒影に襲われるのがごめんである。

(また逃げきれるとは限らないからな。急がないと……)

ロウは手にした針金を、ぐいと穴の中へと押し込んだ。そのとき

「あっ、あんっ……」

宝箱が、喘いだ。

(なっ……?)

予想だにしない出来事に、ロウは戸惑いを隠せず、後ずさる。すると宝箱は、ロウの手に握られた針金を、ぐいと引っ張ってきた。

「な、なんだ!?!」

ロウは手にした針金を鍵穴に持って行かないように、懸命に引っ張り返す。

「ああ……ううん……あっ……」

そして宝箱はまた低い声で喘ぎ、くぐもった声を発しながらうねうねと動き始めた。

周囲の石の色に溶け込んでいた表面が波打ち、次第に明度を上げていく。まるで急速に成長する植物を見ているかのような、そんなあり得ない動きで、宝箱はみるみるうちに膨張した。

啞然とするロウの前で、小さな宝箱だったはずの『それ』は、い

まやすっかり姿形を変えていた。

「ふぁーあ……よく寝たぁ」

そこに現れたのは、ピッキング道具を口にくわえた、一人の女の子だった。

日の光を受けて輝く金色の髪が流れる小川のように長く肩にかかり、白磁の肌は艶やかな張りがある。純白な薄い絹の服はとても簡素なつくりだが、彼女が身につけるとなぜか高貴な雰囲気を感じてきた。長い睫毛、小さな桜色の唇　男に生まれたならば誰でも見とれてしまう美貌は、しかし、決して媚びたような印象を与えるものではない。衣装で着飾った町娘や、化粧で塗りたくった娼婦などでは絶対に真似できない優雅さを身にまとい、祭壇の上に立つ少女は大きな伸びをした。

「んー、はあっ」

ぱちりとまぶたを開け、青金石を思わせる紺碧の瞳がくるりと動いた。欠伸ひとつとつても、優雅さを欠かない少女である。

その美貌に、しばしの間惚けていたロウは、はっと我に返った。

（ち、ちよつと待った！　宝箱が女の子に変身するなんて、聞いたことがないぞ。あり得ないだろ！？）

そんな芸当は、たとえ落し子が『息吹』を使ったとしても、不可能なはずだ。

可憐で儂げな美少女に対して、明らかな恐怖と戸惑いの眼差しを向け、ロウは少女に詰問する。

「い、いまの、どうやったんだ！？　きみはいつたい何者だ！」

すると、たおやかで儂げな美貌の少女は、触れれば消えてしまいそうな印象のまま　しかし、まったく可愛げのない声で言い放った。

「……は？　おっさん、誰？」

まだ二十歳を過ぎて間もないロウを？おっさん？呼ばわりした少女は、不機嫌そうに眉間にしわを寄せ、口に啜っていた針金をふつと吐き出すと、ぼりぼりと頭を掻いた。

「ってか、なんであたし起こされたの？ マジわかんねえんすけど」
ひ弱そうな外見とは裏腹に、やたらとドスのきいたハスキーボイスである。なんとも、第一印象からの落差が激しい少女だ。

（中身のない宝箱を開けたときみたいだな。外面に期待を煽られて、いざ開けてみれば中身は……と、そんなこと考えてる場合じゃない！）

ロウは頭を振って、少女に詰め寄る。

「さっきのは『息吹』なのか？ だとすると、きみは落し子なのか？」

『息吹』というのは、落し子だけが操ることができる、いわば魔法のようなものだ。本当はどんな生き物の体にも宿った力なのだというが、落し子のそれは特別な力を持っているのだという。自分の姿形を変えられる息吹など、ロウは聞いたことがなかったが、一応、念のために確認したのだ。

「何言ってるの、てめえ。マジで意味わかんねえ」

「いいから、ちょっと手を見せてくれ！」

この少女が落し子ならば、その証が必ずあるはずだ。ロウは問答無用に少女の左手を引っ張った。

「うわっ、なにすんだよ、おい！」

少女の抗議を無視して、左手の甲を確認する。が、細い五指をもつ少女の手の甲では、きめの細かい柔肌が陽の光を受けて輝くばかりで、シミひとつない。

（落し子なら、左手の甲に『竜の痣』があるはずだ。ということは、この子はやはり落し子じゃないのか……）

「気安く触るんじゃないよ、この下衆人間がつ！」

少女は汚い言葉でロウを罵りながら、電光石火の勢いで手を引っ込めた。まるで汚物にでも触ったかのように、ロウに触られたところを服で何度も拭う。

「落し子じゃないなら……きみはいったい何者なんだ……？」

ロウはひとり頭を抱えた。もし、この少女が落し子なら、ロウは

偽装屋として支援しなくてはならない。だが、少女には落し子ならば必ずあるはずのもの。左手の甲に黄金色に浮かぶ竜の紋章『竜の痣』がない。よって、落し子ではない。

しかし、この少女は落し子ではないにもかかわらず、たったいま目の前で宝箱から人間へと姿形を変容させてみせたのだ。

（もしもこの子が、落し子の敵となり得るのなら、ここに放置しておくわけにはいかないぞ……）

静かにかがみ込むと、ロウは旅行鞆に手を掛けた。

武装する者を執拗に狙う徒影に襲われないようにするため、偽装屋は普段、武器になるようなものは極力身につけないようにしている。だが、あらゆる状況に臨機応変に対応するため、この鞆のように仕込み武器を隠した道具を携帯するのが常だ。実際、ロウは徒影に襲われたとき、鞆に仕込んだ毒液や短矢の活躍によって、なんとか逃げ出すことができていた。

（女の子を傷つけるのは主義に反するけど、この際、多少乱暴になつてしまうのは仕方ない、か……）

偽装屋が最優先しなくてはならないのは、いつだって落し子の支援だ。怪しげな術を使う者なら、いつ何時、落し子を襲うかわからない。それに、彼女にその意思がなくても、不思議な力を持っているというだけで？ 奴ら？ に利用されてしまつかもしれないのだ。

孤独な旅を続ける落し子たちを自分の不徳に巻き込むわけにはいかない。ロウは少女の隙を伺うようにして顔を上げた。

「もう一度だけ聞くぞ。きみは何者だ？ そして、さっきの妖術はいったい何なんだ？」

すると、祭壇に立つ少女は偉そうに腕組みをして、意外にも素直に名乗りを上げた。

「オレは『ミミック』のシエル。以後、よろしく」

女の子が一人称に『オレ』を使うのもどうかと思ったが、それ以上ロウの気を引いたのは別の単語だった。

「ミミック……？」

その言葉に、ロウは手にした鞆を危うく取り落としそうになった。「なんだ、知らねえのか？ てつきり、オレたちって有名なんだと思ってたんだけど」

つまらなさそうにシエルと名乗った少女は顔をしかめる。対して、ロウはどう言葉を返したらいいものか、反応に窮していた。

「いや、知らないわけじゃないんだけど……」

（知らないわけじゃない。たしかにこの子がミミックなら、すべて説明がつく　でも、それはあり得ないだろ）

『ミミック』　それははるか昔に存在した精霊の種族だ。

あらゆるものに擬態する能力を持ち、一度触れたものになら完璧に姿形を変えてみせる。そうやって人前に現れて、人間たちを驚かせては喜ぶといういたずら好きの精霊。この少女が本当にミミックなのだとすれば、宝箱に化けていたのにも納得がいく。

しかし、それはあり得ないのだ。なぜなら。

「精霊たちは皆、三百年前の幻獣戦争のときに、一匹残らず絶滅したはずじゃないのか？ それにはもちろんミミックも含まれている。きみがミミックなわけが」

「あ、やっぱみんな死んじまったんだな」

本当に彼女がミミックであるならば、同胞の死を意味するはずのロウの言葉を、少女は何の感慨もなく受け止めた。

「いやあ、人間どもがあんなばかでつかい戦争おっぱじめたら、そりゃ精霊だってバタバタ死んでくわなあ。しかも最後の辺り、オレらと契約がどうのこうのって、狩りみたいなことしてたし。ま、仕方ねえな」

「……きみ、仲間が死んでるのに悲しくないの？」

「うーん、別に。そんな仲いい奴もいなかったしな。見ず知らずの精霊がくれたばるよりも、親しくしてた人間が死ぬ方がよっぽど」

そこまで言って、少女は何かを思い出したように口をつぐんだ。

その美しい顔に陰りの色が差したかに見えたが、それも束の間、すぐにまた闊達な表情に変わる。

「で、オレってさつき得意の『擬態』を披露したはずなんだけど。それでも信じてねえわけ？ オレがミミックってこと。目の前で何よりの証拠を見といてさ」

「う……たしかに、まあそうだけど」
「だろ？ だろ？」

ロウが困ったような顔をするのを見て、シエルの方はどんどん明るい表情になっていく。まるで、自分はいたずら好きの精霊だと言わんばかりだ。

「んでよ、これからどうすんのさ。お前、ミハエルに言われて来たんだろ？」

「……誰って？」

人名なのだろう。男性の名前としては古くからある一般的な名前だ。とはいえ、ロウの知人にはいない名である。

「あれっ、違うの？」

シエルは肩すかしを食らったように、きよとんとする。

「ま、まあたしかに、誰かを迎えに超越すだなんて言ってなかったけどさあ。でも、ふつう女を一人で待たせるんだったら、それくらいの気遣いはするよなあ……」

ぶつぶつとつぶやきながら、シエルは頭上を仰ぎ見る。綿をちぎったような雲はすでにどこかに流れ去り、蒼穹がロウたち二人を見下ろしていた。

「げっ、『竜^{エッグ}孵島』もなくなってるし！ ……参ったな、こりゃ」
「参ったなって……きみ、竜^{エッグ}孵島を知ってるの？」

いたって自然に発せられた重要語句に、ロウはすぐさま食いついた。

「ん、ああ知ってるも何も……いや、なんでそれをお前に話さないといけないんだよ。お前、ミハエルの使いじゃないんだろ？ 関係ねーじゃんか」

すねたように口をとがらせ、シエルはそっぽを向いた。

「関係ないなんて、そんなことは……そうなんだけど。と、とにかく

く！ きみは竜髯島とどういつつながりがあるんだ！？」

ロウは心の中で齒がみしながら、叫ぶように言った。少女が口にしたのは、落し子たちが目指す最終地点 無限の天空のどこかを漂う、嵐をまとった浮島の名前だ。もしこの少女が竜髯島の関係者なら、ロウには彼女の手助けをする義務がある。

落し子たちは皆、竜髯島を目指して旅をする。偽装屋が影ながら落し子たちを支援するのも、すべては彼らが無事に竜髯島にたどり着くことを願ってのことだ。

（絶滅したはずの精霊で、その上、竜髯島のことを知っているだつて？ この子、いったい何者なんだ！）

ロウは迷った 自分が偽装屋であることを、この少女に明かしてもよいものかどうか、と。

ロウが躊躇するには、理由がある。偽装屋も、落し子同様、敵の多い存在だからだ。

（もしこの子が『奴ら』の手先なら、うかつに偽装屋であることを明かすわけにはいかない。この子の正体に確信が持てるまで、こっちの正体は隠しておかないと……）

そんなことを考えていると、シエルがまた大きく伸びをした。

「ふぁーあ……まあ、あれだ。住んでたんだよ、竜髯島には。ミハエルと一緒にな」

「す、住んでた！？」

これはまた、とんでもないことを平然と言う。開いた口を閉じることも忘れて、ロウが啞然としていると、シエルは、

「うーん、せつかく目が覚めたことだし、また眠るのもなんだな。

……よし、ここはいつちよ、ミミックとしての本分を果たすとすっかな」

「ミミックの本分……？」

「おうよ。まあ、見てなつて……ほら、あれ」

シエルは形の良い胸を張ると、すらりとした手でロウの背後を指さした。しなやかな指の動きにつられて、ロウは背後を振り返る。

後ろを振り返るのはこれで三度目だ。

そして、三度目もやはり、ロウの背後には何もなかった。

「いったい、何があるっていうんだよ……」

何を指さしていたのか確認しようとシエルの方に視線を戻し、ロウは目を見開いた。

祭壇の上からシエルが消え失せていたのだ。まるで煙になって消えてしまったように、影も形もなくなっている。祭壇の後ろに隠れているのかと思って、慌てて覗き込んだが、そこにもやはり少女の姿はない。

（まさか、そんな簡単に人が消えるわけが　　）

だが、何度辺りを見渡してみても、人っ子一人いなかった。そこにはただ、ロウを囲むようにしてそびえる崖と無機質な遺跡、そして無音の静寂が広がるだけだった。

「幻でも見てたのか、僕は……」

ぼそりと、ロウはつぶやいた。

徒影に襲われ、濁流に飛び込み、得体の知れない太古の遺跡に迷い込んで、自分は頭がおかしくなってしまったのだろうか。

（ミミツクか……幻覚だったと思った方が、よっぽど納得いくよな）
ふうと大きなため息をひとつついて、ロウは旅行鞆を手に立ち上がった。いなくなってしまったものはしょうがない。たとえそれが幻覚であったにしろ、なかったにしろ、ここにずっといるわけにはいかないのだ。

（今日中にベルガノに着かないと、野宿決定だもんな。まあ慣れるからいいけど）

すでに傾き始めた日の光を背に浴びて、ロウは元来た道へと歩き出した。

第三幕

産業都市ベルガノは、市民によって選出された議員が治める、自治都市である。

かつて、辺境にこの街を興した数人の富豪と百余りの職人たちが彼らが寄り合いの場として使っていたとされる建物を改築して、ベルガノ議事堂は建設された。

もともとは富豪の一人が街で最初に建てた私邸であり、そのため内装は議事堂とは思えぬほどに豪華だ。十人以上の人間をゆうに収めることのできる大きな部屋がいくつもあり、年に何回か行われる総議会を除いて、議員たちによる話し合いはもっぱらそちらで行われている。

そんな部屋の中のひとつ。夕焼け色に染まった西空の見える窓を横目に、部屋の壁に交差するように飾られているのは、ベルガノ議事堂と『蛟竜騎士団』の紋章がそれぞれ描かれた二つの旗だ。交差する二つの旗は、巨大な産業都市を支える行政機関の象徴であり、ここがベルガノ自治議会の話し合いの場であることを表している。

いま、中央に長細い四角形の大きな机を陣取らせたその一室で、高齢の議員たちが顔をそろえていた。机の両脇に整然と並べられた所定の椅子に腰を下ろし、老人たちは皆一様に押し黙っていた。

重い空気が支配する中、最初に口を開いたのは、長机の端、壁の交差する旗に最も近い位置に座る一人の老人だった。

「 会議を始める前に、例の劇場について私から質問がある」

老人は、会議の末席に目を移した。そこには窓から差し込む夕陽の光がなくとも緋色に染まった赤毛の目立つ、一人の若い女が座っていた。

「 アリシアどの…… 本当にあの劇場は必要なのかね？」

一堂に会した議員たちの口から、ため息がこぼれる。議員たちの空気を読んでか読まずか、すぐさま指名された女が立ち上がった。

女性とは思えぬ長身が、老人たちのつくりだす厳粛な空気に臆することなく言葉を紡ぐ。

「恐れながら、議長……何を今更、と申し上げたいところですが、やや古めかしく、小馬鹿にしたような言い回しだが、彼女の言葉には議員たちの大半がうなずいた。それは嘆息する議員たちの心境を代弁するものだったのだ。」

アリシア・ル・ファレル　女性にして、蛟竜騎士団ベルガノ支部、その支部長を務める歴戦の騎士は、さらに言葉をつなげた。

「開演を明日に控えて、まだそのような……あの劇場の必要性については、すでにさんざん話し合われたではありませんか。ここに至って、いったい何が不服であると申されるのか？」

議長と呼ばれた老人は、首肯しながらも、どこか納得できないように唸る。

「たしかに、必要性に関しては何の問題もない。より大きく、より裕福になるためだけに発展してきたこの街に、ああいった娯楽施設は必要だ。そこに依存はない。だが」

老人のしわがれた手が、白いあご髭の前でゆっくりと組まれる。

「どうも、近頃の君たちは過激な活動が多い。ついこの間も、近くの村で偽装屋の青年を火あぶりにしたというではないか。少しばかり、やり過ぎではないのかね？」

火あぶりという尋常でない単語に、議員たちの間にも動揺が走る。彼らを見やっつて、アリシアは呆れたように眉をひそめた。

「お言葉ですが……我ら『蛟竜騎士団』の使命は、『竜王』と落し子をこの世から抹殺すること。やつらを支援する偽装屋を処刑するのは、至極当然でございます」

「それはわかっている。もちろん、わかっている」

「では、何が問題だと？ 何の問題もないではありませんか」

「何の問題もない、か……本当にそう思っておられるのか、蛟竜騎士団の騎士は」

最後の方は消え入るようになつばやきになっていた。が、ため息を

ひとつつくと、議長の老人は意を決したようにアリシアを見やった。
「簡単な話だ。君たちのやっていることは……そう、平たく言えば、ただの『人殺し』なのだよ、アリシアどの」

部屋に緊張が走る。何人かの議員は頭痛を起こしたように頭を押さえた。構わず、老人は続ける。

「君たちにとつてはあまり触れてほしくない問題ではあるだろうが、ベルガノ議会は特定の思想で動く機関であつてはならない。議会が資金を援助しているのは、なにも君たちの思想に賛同しているからではないのだよ。そこを忘れないでくれたまえ」

「……わかつております」

アリシアは苦虫をかみつぶしたような顔をした。

「ご心配には及びません。『あれ』は、ただの劇場です。それ以上も、それ以下でもございません。必ずや、議会の皆様ならびに市民の皆様のご期待に添えるような結果をご覧に入れましょう」

蛟竜騎士団の騎士はそれだけ言つと、椅子に腰を戻した。もうこれ以上の議論は必要ないと、言葉にせずとも行為が物語っていた。議長の方もこれ以上の追求はしないで、街の予算についてなど別の議題へと話を移した。

だから、誰も気づかない。

「平和ぼけした豚どもが……」

机の下で拳を握りしめるアリシアの口から、押し殺した小さなつぶやきがこぼれていた。

第四幕

産業都市ベルガノ　その諱が付いたのは、この街が工業で発展した街だからだ。

大陸の南部にあつて、中央の都市から見れば十分辺境と呼べる土地でありながら、ベルガノの街では人の往来が絶えることがない。無論、ここ一帯で最も大きな街であるため、それだけ物流も盛んだというのも、街が活気で溢れる一助になっている。

街の周囲には農作地帯が広がり、この季節は農夫たちが額に汗を浮かべながら麦を刈る姿を見ることが出来る。彼らは朝日が昇る前から働き始め、夕日が沈んだ後もなお作業を続けるが、それでも自前の農地から採れる農作物だけでは街全体の需要を賄うことができないほど、ベルガノの街で暮らす人間の数は多い。

そのため、街の住人たちは他の街の食料から行商人が運んできた食料を買い取ること、街の食料不足を解消している。彼らとの取引に使われるのは、もっぱらベルガノの特産品である貴金属や織物だ。

そのため、街の中は鍛冶屋や金細工屋、織物屋などが所狭しと軒を連ねている。賑やかな街にはそれだけで様々な物が集まるので、各地で採れた農作物、優秀な人材、潤沢な資金も風の噂も、南部で生まれたものならば、一度はすべてベルガノに集うとさえいわれる。その言葉は多少大げさだとしても、たしかにこの辺境の地においてはあながち嘘ではないのかもしれない。

当然、街が大きくなればその分、徒影に襲われる危険性も増す。徒影は本能的に武器を持つ者のみを襲うが、生きるためには狩りをするからだ。狩りの対象に人間が選ばれることも珍しくはない。

だが、ベルガノの徒影対策は万全だ。さすが、工業で発展した都市らしく街の周囲に高い壁をぐるりと建設し、強固な守りで異形の生物の侵入を防いでいるのだ。よほどの大群がやってこない限りは、

その壁ひとつで守備は十分である。そしてさらに、この豊かな街が徒影の襲撃に遭わない理由が、もうひとつあった。

それは蛟竜騎士団と呼ばれる、大陸でも数少ない戦闘集団の存在である。ベルガノの政治を司る自治議会の正式な承認によって、蛟竜騎士団はその支部を堂々と街の中央に構えているのだ。昼夜を問わず、大勢の騎士が街を徒影の脅威から守っている。

『蛟竜騎士団』 世界広しといえども、これほどまでに組織だつて武装した戦闘集団もいないだろう。徒影が武器を持つ者を襲う以上、自ら好んで武器を持つ酔狂な輩はいない。だが、蛟竜騎士団だけは、ある目的のために銀白の鎧兜を身にまとい、必要とあらば鋼鉄の鋭利な剣を振るうのである。

その目的とは、落し子と偽装屋をこの世から抹殺することである。（奴らがいなけりゃ、僕たち偽装屋の仕事も、ちよつとは楽になるんだろっけど）

そんなことをぼやきながら、ロウは閉門ぎりぎりの時間に、ベルガノの壁門をくぐった。奇妙な古代遺跡からずっと歩き通しで、谷底ではびしょびしょになるまで濡れた服も、いつの間にか乾いていた。

肉体はまさに疲労困憊の極地にあるが、しかし今夜の宿をすぐに探さなくてはならない。すでに辺りは暗くなりかけており、家々に明かりが灯り始めていた。

（街の入り口で蛟竜騎士団の検問がなかったのはよかったけど、まだ油断ならないからなあ……）

ベルガノの街中に足を踏み入れてからというもの、ロウの顔は険しい。蛟竜騎士団が駐屯する街において、偽装屋はただ宿を探すだけでも命がけなのである。

徒影の出現によって法治国家の概念がなくなりつつあるこの世界において、蛟竜騎士団のような統一された武装集団がはつきりと敵に回るといふのは、驚異以外の何ものでもない。ロウはこれまでの旅で、幾度もその恐ろしさを経験していた。

（火あぶりにされかけたりとか、数十人に追い回されたりとか……
笑えないよ、まったく）

ため息をつき、ロウは重い足で夕闇の街を歩く。下手な宿に泊まると、偽装屋であることがばれたとき、蛟竜騎士団に密告されかねないのだ。そんな危険は冒せない。

（たしか、ベルガノには偽装屋のギルドがあつたような気がするんだけどな……そこなら安全なんだけど）

ギルドというのは、偽装屋に報酬を支払う組合のことである。

徒影の脅威から守ってくれるため、蛟竜騎士団は広く民衆に受け入れられているが、それでも全員が彼らを歓迎しているわけではない。地方の貴族や富豪にもそれはいえることで、蛟竜騎士団に不満を持つ有力者を出資者にして、シェイプシフター・ギルドは個人で活動する偽装屋に宝箱の補給や金銭を供給しているのだ。

ロウは宿屋を目にする度、店の前に掲げられた看板を注意深く観察した。

偽装屋を受け入れている店の看板には、仲間内にしかわからない小さな目印がついているものだ。一軒一軒、ゆっくり時間を掛けて確認し、三件目にしてようやく、ロウは目当ての看板を掲げる宿屋を発見した。

二階建ての宿屋の一階はちょっとした酒場も兼ねているらしく、扉を押し開けて中に入ると夜の喧噪と酒精の香りが押し寄せてきた。「いらっしやい。酒かい？ それとも泊まりかね？」

気前の良さそうな亭主が、カウンターのの中から声をかけてきた。

「両方頼むよ。でもまあ酒は後でいいや。部屋は空いてるかい？」
「ちょうど一部屋空いてるよ。階段を上がって、右手の二つ目の部屋だ。宿代は半分が前払い。残りは出て行くときに頼むよ」

ロウは亭主から提示された金額をカウンターの上に置いて鍵を受け取ると、粗っぽい作りの階段を上がった。

（右手の二つ目だよ……これか）

これまた粗っぽい作りのドアを開け、質素というよりも貧乏くさ

い部屋へと足を踏み入れる。中には粗末なベッドがひとつ。それに傾きかけている机がひとつ。安い宿代に見合った、実に殺風景な内装だった。

(まあ警沢する必要もないしな……)

ロウはベッドにどっかりと腰を下ろした。途端に、これまでの疲れがどつと押し寄せてきた。あやうく睡魔に意識を持って行かれそうになる。

(……っと、まだ眠るわけにはいかないだった)

ロウは旅行鞆を引き寄せると、縁についた汚れを丁寧に手で払い落とした。これからも長く付き合っていく鞆だ。大事にしなければならぬ。

汚れた服も着替えようかと鞆の留め金に手を掛け、だがやはりやめておいた。

(これしきのことδειいちいち着替えてたら、服が何枚あつても足りないもんな)

徒影に襲われようが、谷底に飛び込もうが、大したことないと言いつけるだけの度胸。それが偽装屋としての自分の強みであるというのが、ロウの持論だった。

(さて、宿も確保したし、ギルドの場所でも探っておこうかな)

ロウは腰を上げると、持ち歩くのが癖になってしまっている旅行鞆を片手に、一階へと下りた。先ほどの気さくな亭主に適当な酒を注文し、少しだけ声を落として尋ねる。

「ところで、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」
「極力、さりげなさを装ったその質問は、途中で亭主の声に遮られた。」

「うちの地下は会員制のバーになっててね。悪いけど、見せるものを見せてくれないと入れないよ」

亭主は唐突にそう言って、いたずらっぽく笑い、あごで店の角を指し示した。角張ったあごの先には、やけにしっかりとした造りの扉がある。

「ま、お客さんが『そういうの』じゃなかったら、ここで飲んでいきな」

「……いや、僕は『そういうの』だから、地下のバーとやらで飲むことにするよ」

冷静なふりをしてロウは返したが、内心では舌を巻いていた。

（さすが、でかい街に偽装屋用の宿を構えてるだけのことはあるなあ）

亭主はロウの質問を先取りしたのだ。この街のシェイプシフター・ギルドはどこか、という質問を。まさか宿屋の地下にあるとは思っていなかった。

「よくわかったね。やっぱり、経験ってやつ？」

「まあな。この街じゃ、あんまり手袋してるやつは見ねえからな。それが旅行鞆ひとつで泊まりに来たってえと、まあおよそ目的はひとつしかねえだろ」

屈託のない表情で、亭主はげらげらと笑った。つられて笑いながら、ロウは渡された酒を一息で飲み干し、言われた扉へと向かった。やけに重い鉄扉を開けると、階段が地下へと伸びていた。

（毎度のことと思うけど、どこのギルドもほとんど変わらないつくりなんだなあ）

そんな感想を抱きながら、階段を下る。下りた先に、鋼鉄製の頑丈な扉が控えていた。扉のちょうど目の高さくらいの位置に、のぞき穴のような切れ目があった。

ロウがその前に立つと、のぞき穴の向こう側から声がした。

「『しるし』は？」

ロウは無言で右手の手袋を外すと、それを裏返して扉の方に向けた。いつもはめられている手袋の裏側には、落し子の『竜の痣』を模して描かれた偽装屋の証。支援者の紋章がある。

偽装屋になるには厳密な審査が必要だから、この刺青は同時に、偽装屋であることの何よりの身分証明でもあった。ロウが偽装屋の紋章を見せると、ややあつて鋼鉄の扉から門が外される音がした。

「さあどうぞ　ようこそ、ベルガノへ」

扉の中から出てきたのは、長い黒髪を腰まで垂らした妖艶な女性だった。

「わたしはクリス・ウォルトン。ひさしぶりの偽装屋さんだから、なんだか嬉しいわ。よろしくね」

「ロウ・レイズです。滞在中、お世話になります」

握手を交わし、ロウは扉の内側へ招き入れられた。

中に入ると、地下室だというのにずいぶん明るいことに驚かされた。天井から吊された変わった形のランプが、隅々まで部屋を照らしているからだ。しっかりと空気の流れも計算されているようで、淀んだ感じはない。さすがは産業都市である。

部屋の壁に目を移すと、客に出すのであろう多種多様な酒が置かれた棚があり、その前にはカウンターがあった。部屋の真ん中には数卓の小さなテーブルが置かれているので、なにもカウンター席だけが酒を嗜む場所というわけではないらしい。テーブルの回りではすでに十人余りの男女が、ワイングラスを片手に談笑していた。椅子は置かれていないので、テーブルに置かれた鮮やかな料理は立っただまま手でつまんで食べている。

「おつ、兄ちゃん。新しいお客さんかい？」

「ゆっくりしてけよ。ここの店はうまい酒出すから」

ロウに気づいた何人かが声を掛けてきた。皆、すでに出来上がっているらしい。

(これ、全員が偽装屋なのかな……?)

ロウはにこやかに応じつつも、内心は疑り深く彼らを観察した。

偽装屋はばらばらに各地を旅しているのが常なため、十人以上が一室に会するなど滅多にない。もしこの中に、蛟竜騎士団の密偵でも紛れ込んでいたら話は別だが。

そんなロウの不安を感じ取ったのか、クリスが振り向く。

「安心して、彼らはこの街で暮らすギルドの出資者たちよ。お酒がおいしいからって、毎晩、ここに来てくれるの。お陰でわたしも寂

しくないわ」

「あ、そうなの？ そういえば、この街のギルドは会員制のバーの形を取ってるって、上で言ってたっけ」

「そうなのよ。みんな馴染みのお客さんだから、ここを蛟竜騎士団に売ったりはしないわ。今のところ、本職の偽装屋さんはあなただけね」

「僕だけ？ 他に偽装屋は来てないの？」

「そうね、ちよつと事情があつて……たぶん、みんな敬遠してるんだと思うの」

思わせぶりに手招きして、クリスはカウンターの中へと入つていく。ロウは旅行鞆を適当な床に置くと、彼女の前の席へと腰を下ろした。

「こんな大きな街だから、昔はもつとたくさんの落とし子や偽装屋が行き来してたんだけど……あなた、この街が議会に治められてるのは知ってるわよね？」

「市民から選挙で選ばれた議員たちが、話し合いで政治を行ってるんだよね？」

ベルガノの街の政治制度は、民意を反映しているとかで、他の街の評判もいい。

(それが、何か問題なんだろうか？)

ロウは首を捻った。クリスがさらに説明を続ける。

「その議会が、公に蛟竜騎士団を迎え入れちゃったものだから、ここ数年の間で、この辺りで騎士に捕まる落とし子や偽装屋が増えるのよ。たいていはいわれもない罪だけど、蛟竜騎士団が無理矢理連れて行って処刑しちゃうの」

クリスは申し訳なさそうにうなだれた。漆黒の瞳には深い憂いの色が浮かんでいる。本来なら、そういつた弾圧から落とし子や偽装屋を守るのも、ギルドの役目だからだ。

「蛟竜騎士団の支部長が替わってから、急に摘発が多くなって……噂では、裏で誰かが糸を引いてて、この街で』とんでもないもの』

をつくつてゐるって話なんだけど。あなた、知らない？」

聞かれて、ロウは苦笑する。肩をすくめて、首を横に振った。

「知ってたら、ここに立ち寄りたりしないよ。僕たちは逃げるのが得意だから」

自嘲めいた笑いに、クリスも同調して微笑みを返す。目を細める彼女から母性的な魅力が溢れ出ている。ロウの顔が思わずにやける。さておき、偽装屋がない疑問は氷解した。なるほど、どうやら偽装屋たちの多くはベルガノに着く前に、街道を行く行人や農夫たちから蛟竜騎士団の噂を聞いて、迂回路を取っているらしい。

（僕は仕事しながら来たから、そういうの耳に入れられなかったもんなあ）

もし知っていたらこの街を避けて旅程を組んだらどうか、とは考えずにおいた。クリスのような美人と二人きりで話すことができたのだから、よしとしようではないか。

「でも、あなたが来てくれて嬉しいわ。偽装屋の来ないギルドなんて……わたし、やっていく自信をなくしかけてたところだから」

垢抜けた笑顔で嬉しそうにクリスは語る。この笑顔を見られただけでも、この街に立ち寄った価値があったというものだ。

思わず綻んでしまう顔を引き締め、ロウは軽く咳払いをした。仕事のできる男、というものをアピールしておいた方がいいだろう。

「じゃ、そろそろお仕事の話をお願いするよ。早く酒も飲みたいし」「そうね。ちよつと待ってて」

うなずくと、クリスは一度カウンターの奥へと姿を消し、再び現れたときには分厚い帳簿と地図を抱えていた。

「じゃ、まずは今回の集計ね。新しく設置した宝箱の数はいくつ？」「全部で四つだね。中身は、食料が二つに、武器と薬草が一つずつだよ」

言いながら、ロウは手渡された地図に、自分が宝箱を置いた場所を書き込んでいった。小さな宝箱に入れられる中身はだいたい限られており、食料、小型の武器、医療品、金品くらいしかない。よっ

て、それぞれに応じた数種類の印のつけ方が決まっている。

偽装屋がギルドからもらえる収入は、良くも悪くもすべて歩合制だ。落し子が旅の途中で拾った宝箱をこういった街のギルドで申請し、それを置いた偽装屋にギルドが金銭を支払う仕組みである。出資者だって仕事をしない者に投資はしたくないだろうから、当然といえは当然の制度である。

ロウが地図に印を書き込む間に、クリスは帳簿をめくって、落し子に拾われたロウの宝箱の数を確認した。使用された宝箱の情報は、馬車や伝書鳩によってギルド同士で完全に共有されているのだ。

「あら、あなた、優秀じゃない。前回から数えて、六つも拾われているわよ。いい仕事してるわね」

クリスはそう言うと、硬貨を数えて小さな袋につめた。

「はい、これ。前回分の報酬よ」

「ありがとう。助かるよ。そろそろ旅費が底をつきかけていたところなんだ」

ロウは金を受け取って微笑んだ。これでまた、偽装屋としてギルドからの評価が上がったことになる。

報酬に歩合制を採用しているということは、偽装屋へのギルドの評価は必然的に仕事の出来で決まってくる。優秀な偽装屋というのはつまり、落し子にできるだけ多くの宝箱を拾わせることができる者のことだ。そして、ギルドから優秀であると認められれば、旅先での待遇がそれに伴ってよくなるのは自然の成り行きだった。

その証拠に、ロウを見るクリスの視線が、先ほどと比べてやや熱を帯びたものへと変わっている。

(これも役得ってやつかもしれないな)

艶めかしい濡れ羽色の髪の乙女。選り好みができるほど女性に好かれる質ではないので、ふだんは好みについて考えることなどないのだが、改めて熟考すると、ロウはクリスのような女性が好みだった。

差し出されたワイングラスを傾けながら、ロウとクリスは世間話

に花を咲かせた。仕事の時間は終わり、これからは個人的な交友を楽しむ時間である。趣味や休日の過ごし方、好きな本などについてひととおり話し終え、月並みな話題も尽きたところで、ロウはふと昼間のことを思い出した。

「そういえば、今日、変な奴を見かけたんだ」

「ん？ 変な奴って？」

ロウが投げた餌に、クリスが興味津々といった様子で食いついてきた。こういうやりとりはいつぶりになるだろう。言葉と言葉の間さえ楽しみながら、ロウは肩をすくめてみせた。

「ああ、自分のことをミミックだって言う女の子に会ったんだ」

すると一瞬、クリスはきよんとして　そしてすぐに、けらけらと笑い出した。上品さをまったく崩さないところは、さすが客商売をしているだけある。だが腹を抱えて笑うその目には、透き通った小粒の涙まで浮かべていた。

「おいおい、そんなに笑うことないだろ？」

「ごめんなさい。でも、急におかしなこと言い出すから……」

目尻をぬぐいながら、それでもクリスはくつくつと笑いを堪えるのに必死だ。

「ミミックだなんて……それはまた、とんでもない珍獣と出会っちゃったわね」

「出会っちゃったわねって、きみ信じてないだろ？」

「そりゃそうよ。森の精霊なんて、おとぎ話の中でしか聞いたことないもの」

彼女の言うように、この三百年の間、精霊を見かけたという話はない。

（精霊の噂すら立たないもんな。信じないのも無理ないか　僕だつて、あれが本当にミミックだったのか、まだ自信がないわけだし）
昼間見たあの少女は、いったい何者だったのか。やはり自分が幻覚を見たにすぎなかったのだろうか。ロウはグラスに注がれたワインを一気にあおった。

「おとぎ話、か……」

ロウがつぶやくと、ようやく呼吸を整えたクリスが、

「それとも、なあに？ 夢のある話で、わたしを口説いてるの？」

そう言っつて、いたずらっぽいな笑みを見せる。

「さあてね。偽装屋は簡単に気を許さないからなあ」

「ふふ……懸命なこと」

ロウはワイングラスをカウンターに置いて、椅子から立ち上がった。その女と明日も会えるときは、話が盛り上がったところで余韻を残しつつ去るのが上策。いつぞやか、旅先の酒場で遊び人から聞いた話だ。

「じゃあ、今日はこの辺にしておくよ。ごちそうさま」

「あら、もう休んじゃうの？ 残念」

「一応、長旅で疲れた身だしね。また明日も来ていいかい？」

案の定、クリスは満面の笑みでうなずいた。

「ええ、もちろん。楽しみに待ってるわ。それじゃ、今夜はしっかり疲れを癒してね。これ、わたしからのおごりよ」

クリスはカウンターの下から、小さく折りたたまれた紙を取り出した。

「寝る前に飲んでみて 精力つくから」

「おつ、気が利くね。ありがとう」

くすくすつと微笑むクリスと視線を交わし、ロウは薬包を受け取った。

「お前つて、下心丸出しだなあ。これだから人間は」

「まあそう言っつなつて。健全な男子なんだよ、僕は……えっ？」

無視しかけたのをとどまっつて、ロウは慌てて声のした方を振り向く。

（なつ……！？）

さつきまで誰もいなかった隣の席に、見覚えのある金髪の子が座つていた。

「へっへっへー、潜入成功つてか？」

少女は口ウの手から薬包を取り上げると、オブラートごと口の中にぽいと入れた。

「むしゃむしゃ……うん、なかなかいい薬だねえ。たしかに精力つくわ、こりゃ。オレの下半身が元気になったって仕方ないんだけどさ。ははっ」

「ごくん、と飲み下し、少女はのんきにあくびをする。

「きみ、昼間の！」

と、その刹那、上品な笑い声であふれていた店内は騒然となった。「し、侵入者よ！」

カウンターの中で、クリスが悲鳴にも似た声を上げたのだ。他の客たちの視線が一瞬にして少女に集まり、たちまち店の中は殺気で満ちた。

「き、貴様っ、いったいどこから入ってきた！」

「蛟竜騎士団の密偵か!？」

談笑していた客たちが、ワインボトルを片手に、一斉に少女を取り囲む。

「お、おいおいっ、ちょっと待った！ とりあえず落ち着こうぜ！」

少女は つい数時間前に出会ったばかりの、見た目だけならいたいけな女の子は 両手を頭の上にあげて慌てふためく。

「そんな殺気立たなくてもいいだろ？ な？ そうだ、話し合おう。話せばわかる！ ほら、お前からも何か言っやってってくれよ」

なれなれしく、そして悲痛な眼差しを口ウへと向けてくるが、そんなこと知ったことではない。

「なんできみがここにいるんだ！ どうやって忍び込んだ？」

「ははっ、よくぞ聞いてくれました。実はね……と、その前に」

かわいらしい見た目と裏腹な言葉遣いの少女は、困ったような顔をして、

「お願いだから、この人たちをなんとかしてえ……」

大勢に囲まれて、ぶるぶると震えながら涙目で訴えてくる『自称 ミミック』の少女に、口ウは大きなため息をついた。

第五幕

「だからさあ、悪かったって。何度も謝ってるじゃんか」

後ろからついてくるふてくされた声を、ロウは完全に無視して歩き続けた。

「なあなあ、無視すんなって。オレ、何百年も誰ともしやべってなくて、これでもけっこう寂しかったんだぜ？」

二人がいるのはベルガノの街の外、満月の照らす川沿いである。穏やかな水流が二人の傍らを前方から背後に向かって流れている。二人の進む方向の地面がやや小高くなっているのは、流れをさかのぼっているからだ。清く澄んだ水面は、ランプが必要ないほどに輝く黄金色の満月をくつきりと映して揺らめいていた。

(くそ、なんで僕がこんな目に遭わなきゃならないんだ……)

川辺の砂利を蹴飛ばして、ロウは毒づく。というのも、夜になって閉まった壁門の代わりの抜け道をわざわざクリスから聞いてまで、若き偽装屋は今日やって来たばかりの道を逆戻りしているからだ。声にくそ出さなかったが、小刻みに震える双肩から怒りのほどが読み取れる。

それもこれも、頭のネジが何本か抜け落ちている、おめでたい精霊のせいであった。

「ロウさん、もしもーし。ほら、考えようによっちゃあ、こんな美少女と深夜のデートじゃん？ かえって運が良かったってもんじや……」

「ああもう、さっきからうるさいんだよ！ 誰も好きこのんで連れてきたわけじゃないんだ！ 黙れ、もしくは力尽くても黙らせるぞ！」

ついに堪忍袋の緒が切れたロウが、鬼の形相で背後のシエルに詰め寄った。頭ふたつ分は低い彼女を鬼の形相で見下ろして、怒声をあげる。

「きみ、自分がどれだけ僕に迷惑かけてるか、わかっているの？」

「あはは……ごめんなさい」

しゅん、とうなだれて、ミミックの少女はうつむいた。いかにもしおらしい彼女の様子に、ロウは大きな嘆息を吐き捨ててきびすを返す。ここで怒鳴っていても仕方がない。再び歩き始めた青年の後ろを、精霊の少女はまるでコバンザメか何かのようにぴったりと張り付いてくる。

ロウの脳裏に、にらみをきかせたクリスの顔が蘇ってくる。

『へえ、あなたこの子の知り合いなの……知り合いなら当然、面倒見てくれるわよね？』

宿屋の地下で密かに営んでいたシェイプシフター・ギルド。厳重な鉄扉に守られた秘密の酒場に開業以来、初めて侵入した少女はその後、ロウとともにこつてりと事情聴取された。摩訶不思議な能力を見せることで、彼女が精霊の生き残りであることは信じてもらえたものの、その処遇は拷問にも似た質問攻めからようやく解放されたロウに一任されることになったのだ。

（せっかくクリスといい雰囲気だったのに。手の込んだいたずらしやがって、このミミックは……どうせ絶滅するなら、最後の一匹までしっかり死んどけよな！）

出会ってから半日も経っていないのはシエルもクリスも同じはずだが、どちらが魅力的かは言うに及ばず。外見はたしかに女性の印象その他諸々を決定づけるが、そんなもの所詮は偽物の美しさで、最終的に大切なのは内面を含めた本物の美貌である。なにが美少女とデートだ。まったく嬉しくない。

「よりによって、一番なくしたら困るものに化けやがって……なんでもまた、僕のトランクなんかに化けたりしたんだよ！」

「いやあ、一番手頃だったもんでさ……つい」

あははは、と間の抜けた笑いでシエルは誤魔化そうとする。あるうことかこのミミック少女は、ロウの旅の装備がすべて詰まった大切な商売道具になりすまして、ギルドへと忍び込んだのだ。本

物はもちろん、例の遺跡に放置したままである。

「そんな大事だったのか、あの鞆？」

「お前には関係ない！」

毒づいて、ロウは足を速めた。大事ななんてものじゃない。あの鞆は旅から旅へのロウにとつて、唯一、自分の縁とできる宝物だった。(なんて情けないんだ。いままで肌身離さず持ち歩いてきたのに、すり替えられたことに気づかなかったなんて……)

しかし、いまとなってはもう後の祭りである。

「なんなんだよ、きみのそのけつたいな能力は？ 精霊つてのはみんな、そういうはた迷惑な力があるのか？」

罵声にも似た問いかけに、やっと自分に興味を持ってもらえたシエルが、待ってましたと言わんばかりの明るい声で答える。

「おつ、よくぞ聞いてくれました。あれはな、『擬態』っていつて、精霊の中でもオレたちミミックだけが使える特別な魔法なのさ」

野兎のように飛び跳ねながら、シエルはロウの前に躍り出て、その肩をぽんと叩く。

「ほら、こうやって一度触ったものなら」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、少女の皮膚が波打ち始める。巨大な粘土が名匠の手でひとつの彫像に形作られていくように、あつという間にその体格が男性のそれになる。

そこに現れたのは、鏡にでも映したかのように精巧な、もう一人のロウだった。

「な？ すぐえだろ。ちつたあ尊敬したか？」

誇らしげに自慢するその声も、先ほどの可愛らしい美声と違って、野太い男のものになっている。もっとも、汚い口調は相変わらずだった。

「見た目、大きさ、重さ、さらには触ったときの微妙な感じまで、すべてを丸つきり完璧に再現できるんだよ、オレたちミミックは」

澄み渡った湖に小石を投じたときのように、またもやシエルの体表は波打って、今度は黒髪の女性へと変貌する。ギルドにいたとき

に触れたのだろう。その姿はまさにクリスと瓜二つだった。

「うっふーん、どう？ あたしと『イイコト』してみない？」

「遠慮する。気色悪いことするな」

シエルの　　というか、クリスの　　妖艶な体を乱暴に押しつけてから、ロウはため息をついた。

（はぁ……なんでまた、こんな面倒なやつに出遭っちゃったんだ）

大昔に絶滅したはずの精霊に出会えたことは、本来ならばとても貴重な体験であり、人によっては一生の宝物にするような出会いだしかし、この手の『異常な』生き物が幸運ではなく災難しかもたらしてくれないことを、ロウは偽装屋としての経験からすでに学習済みだった。その証拠に、再び元の可愛らしげな少女の姿に戻ったシエルは、

「オレたちミミックはさ、ほら、人間をからかうっていうか、おちよくるっていうか……そういうのが生き甲斐なんだよね。ま、本能ってやつ？」

などと、口にはしている。おちよくられる方はたまったものではない。ロウの眉間のしわは、よりいっそう深く刻まれるばかりだった。

「ま、そんな深刻そうな顔すんなって。明るく行こうぜ、明るく。その方が人生、きつと楽しいぜ」

大声で笑いながら、深い夜であっても底抜けに明るいミミックが、先を進んでいく。嘆息とともに大きく肩を落とした偽装屋は、亡霊にでも取り憑かれたかのような淀んだ空気を身にまとって、とぼとぼとその後を歩いて行った。

二人が辿る川の周囲の地面は、次第にその高さを増していき、やがて切り立つ崖へと変貌した。谷底を進み、しばらくすると昼間くぐり抜けた洞窟を見つけた。月明かりだけを頼りに洞窟の内部を手探りで進み、ロウとシエルは再び古めかしい石造りの遺跡へとたどり着いた。

円形に切り取られた星空が、青年と少女の姿をくつきりと映し出していた。二人は中央の祭壇へと伸びる石橋の上を進んだ。

「やっと着いたか……で、鞆をどこにやったんだ？ まだここにあるんだろ？」

先に行く少女の背中をねめつけて、ロウは低い声で尋ねた。びくり、と少女の肩が跳ね上がり、中央の祭壇を前にして、ぎこちなく振り返った。

「えつと……まあ、あれだ。その、なんだ。ええと……」

「怒らないから正直に言ってくれ。あれが見つからないと本当に困るんだ」

優しく諭すというよりは、脅しに近い形で、再度、尋ねる。親に叱られた子どものように、シエルはあちこちに視線を泳がせよくできた石膏細工のように白い指先を、塔の下に広がる暗闇に向けたのは、ずいぶんと時間が経ってからだだった。

「まさか！ 落としたのか、この下に！」

「怒らねえって言ったじゃんかよ。嘘つき 痛っ！ わ、悪かった悪かった、謝るってば。落ち着こうぜ、とりあえずさあ」

ぶたれた頭をさするシエルの横で、ロウは石橋の下に広がる暗闇に目を落とした。眼下には満月の輝きをしてもなお照らし出されることのない、常闇の崖下が広がっている。距離にしていかばかりか、考えることすら拒否させる深さだ。

「拾いに行けるわけないだろ、こんなところ……」

ロウは、へなへなとその場に座り込んだ。全身が脱力して、言うことを聞かなかったのだ。

（災難にも程がある。いつたい僕が何をしたっていうんだよ……）

絶望するロウの肩に、優しく手が置かれる。

「まあそんなに気を落とすなって、青年。たかが旅行鞆じゃないか。街でまた新しいのを買えばいいだろ？」

「そんな代わりの利く物じゃないんだよ、あの鞆は！ 知ったような口を聞かないでくれ とうか、全部きみのせいだろ！」

かみつくように激昂して、ロウはシエルをにらみつけた。この青年の穏やかな為人を知る者であれば、同一人物であることを疑って

しまうほどの激しい怒りだった。彼の憤怒の表情に恐れをなしたのか、シエルは一步退くと、わざとらしく肩をすくめてみせる。彼女の小さな肩がわずかに震えていたのは、月夜とはいえロウには見えない。

「は……はいはい。わかったわかった。わかりましたよ。取りに行けばいいんだろ、取りに行けば」

精霊の少女にしては精一杯の強がりを見せて

「よっと」

唐突に、祭壇から跳躍した。

「お、おい！ 危ない！」

シエルの華麗な跳躍は、ロウが谷底の濁流に飛び込んだときのようで、しかし飛び込んだ先は底の見えない塔の崖下である。とっさに伸ばした手をすり抜けて、石橋の下へと少女の体が落下していく。二秒と経たないうちに、金糸の髪をなびかせた少女は穴底の暗闇へと姿を消した。

(この高さから飛び降りって、死ぬぞ!?)

気でも狂ったのか。自分が強く言いすぎたのがいけなかったのか。様々な思いが瞬時にロウの頭を駆け巡り、その顔が後悔で歪む。と、次の瞬間。

「……は？」

ロウは突如として吹き荒れた突風に目を細めた。巨大な鷲が一陣の風となって塔の側面を駆け上がってきたのだ。その屈強な両足には、なぜか見覚えのある大きな旅行鞆がぶら下がっている。若き偽装屋が、たったいま何が起こったのかを理解するまでに、数秒ほどの時間を有した。

「……そういうことか。脅かすなよ、もう」

怪鳥の二本の足がしっかりと握った旅行鞆を受け取りながら、ロウは安堵のため息をついた。旅行鞆を持ち主へと返した怪鳥は、ばさりと音を立てて殊更に大きく羽ばたくと、再び少女の姿へと形を変えた。

塔から飛び降りたシエルが、鳥に擬態して鞆を拾ってきたのである。

「ん？ オレが飛び降りるもんで、びっくりしたんだな？ 驚いたんだな？ へへっ」

ロウの心配などどこ吹く風で、得意満面にシエルが胸を張る。だが、そのときにはすでに偽装屋の青年の関心は手元の旅行鞆へと移っていた。

「ああああ、こんなに傷ついちゃって。俺の大切な宝物なのに……」
赤子をあやすような動きで、あるいは恋人と戯れるような手つきで、ロウは長く苦楽をともした旅行鞆をなで回す。その異常なまでの愛情表現を見て、シエルは眉をひそめた。

「お前、実はすっげえ気持ち悪いやつだったんだな……」
「うるさい！ 偽装屋の仕事道具だぞ、馬鹿にするな！」

偽装屋の装備品は、基本的にその人個人の嗜好が色濃く出る。とはいえ、だいたい似たような旅行鞆を持って活動している。つまり、鞆はそれだけ彼らにとって重要なものなのだ。野宿を何泊しようが、トランクひとつで済ませてしまうような職種なのだから、仕方がないといえば仕方がない。

おそらく何百年ぶりに人間を驚かせることに成功して、心底満足げなシエルをよそに、ロウはさっさと立ち上がった。

（鞆が見つかったんだから、もうこんなところに用はない。早いとこベルガノに戻って、宿で休もう……）

行きとは違い、帰りは長らく愛用してきた装備品がある。ロウは旅行鞆の中からランプと着火具を取り出して、明かりを灯そうとした。

と、その手が止まったのは、ちょっとした偶然の産物だったかもしれない。薄暗い視界の端に、満天の星空を見上げて立ち尽くすシエルを捉えたのだ。瞬き一つせず、哀愁漂う表情で夜空を眺める少女につられて、ロウも頭上を仰ぎ見る。

古の伝説に登場する精霊たち 彼らの名を冠した星座が、精霊

たち亡きいまもなお、夜の天空を埋め尽くしていた。

(グリフォン、ウインディーネ、ドラゴン……ミミックの星座はあったっけな?)

遺跡の大穴によって真ん丸に切り取られた星屑の舞台に目を走らせ、しかしそれは隣で立ち尽くす精霊の少女が見ているものではないことに気づく。

(そうか、この子は)

ロウは手元に目を戻すと、持っていたランプと着火具をそっと旅行鞆の中へと戻した。

明るくするのは、もう少し後でいい。人には暗くて静かな場所、思い出に浸りたいときがある。それはきつと、精霊も同じなのだろう。

(そういえば、昔、こんな風に見上げてたやつがいたっけ……)

ロウの脳裏にも、ずっと以前の光景が浮かんでいた。気づけば、唇が勝手に言葉を紡いでいる。

「……帰れるさ、きつと」

突然の台詞に、シエルが惚けたようになった。

「えっ……?」

そんな精霊の少女をロウは優しい眼差しで見やった。

「きみ、竜髯島に住んでたんだろ?」

初めて出会ったとき、たしかそんなことを言われたはずだ。思い出に浸っていたシエルは、ゆっくりとうなずく。

「ああ、ミハエルと一緒に、少しの間だけだったけどな」

「気になってたんだけど、そのミハエルってのは? 竜王? なのか?」

「竜王……? なんだそれ?」

シエルの疑問に、ロウはできるだけ簡潔な答えを模索する。

「そうだな……一言でいえば、竜髯島に住んでる王様ってところかな。地上の人間たちがつまらないことで戦争とかしないように、空からいつも見張ってくれてるんだ」

遠い目で、ロウは空を見上げる。落し子たちは皆、竜髯島に住まう彼に会うために、竜髯島を目指して孤独な旅を続けているのだ。蛟竜騎士団の弾圧にも、土地の人々の無理解にも負けず、ただ黙々と。

「ああ、そういうことが……」

黄金色の長い髪を夜風になびかせて、少女はつぶやいた。

「ミハエルもいつも言ってたな。戦争なんて馬鹿げてるって」

細められた目は、かつてそこにあっただはずの、巨大な浮島の影を見ているようだった。

「竜髯島に帰りたい？」

ロウの問いかけに、シエルは珍しく素直にうなずいた。弱々しく、しおらしく。

「……どうしようかな。オレ、これから」

それは月明かりの下では消えてなくなってしまうような、小さな声だった。乱暴な言葉遣いで気丈に振る舞ってはいるが、仲間の精霊たちがいなくなってしまった世界。とりわけ、ミハエルとかいう人物のいない世界が、彼女にとって孤独なものであることに変わりはないのだ。

（さっきまでは強がってただけ、か……まるで、昔の？あいつ？を見てるみたいだな）

何を思いだしたのか、ロウはくすりと笑って、

「そうだな、ひとまず僕と一緒に街に戻ろうか」

「えっ？」

意外な申し出に、シエルは呆然とする。ロウは至極当たり前といった感じで、

「僕は偽装屋だよ。竜髯島を目指す者の手助けをするのが、僕の仕事だ」

そして、手に持った旅行鞆を得意げに叩いて見せた。

「しばらくはきみの面倒は僕が見るよ。そのうち、落し子と会うこともあると思う。そしたら、彼らについて行くなり、好きにすれば

いい。彼らなら、竜髯島に行く方法を知っているかもしれない」

「それはありがたいけど……いいのか？」

「言ったはずだよ。僕はきみみたいな人を助けるのが仕事なんだよ。今までに何人も落し子が竜髯島にたどり着いてるんだ。きつとあるさ、きみが竜髯島に帰る方法も」

本当はそれ以上に、志半ばで倒れる落し子の方が多いのだが

いまは二人とも、厳しい現実より甘い夢を見ていたい気分だった。

「ああ、そうだな。きつと帰れるよな……」

どこか遠くを見るように、シエルはまた目を細めた。

柔らかな桜色の唇が小さく『ありがとう』と動いたことに、ロウは気づかないふりをしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1593x/>

ミミック・ガール

2011年10月19日08時12分発行